

# 2013 白球の詩

**上毛**  
**スポーツ**

2013年
7月10日
水曜日

同点で迎えた八回裏1死。「大丈夫だ。思い切つてこい」。この回からマウンドに上がった今野創太に声をかけた。出したサインはインコースの直球。ミットめがけて投げ込まれた2球目は、左翼手の頭を越えてスタンドに消えた。相手に入つた決勝点。

中学時代は名門の太田ボーイズで腕を磨いてきた。体が大きく、バットに当たれば外野手を越えるスラッガー。ただ、才能のある選手が集まるチームの中では目立たない存在だった。チームメートには農大二主将の周東

ナインの信頼を受け、本塁を死守する  
館林の富岡 上毛新聞敷島

佐京、前橋商のエース岩崎巧、樹徳主将の山岸龍平がいた。

自分も同じように強豪校へ進学することも考えた。しかし、練習量も多い競争も激しい。不器用と自覚もしていた。「自分の野球が通用する自信がなかった」

将来の進学を考え、自分の意思で勉強と野球の両立を決めた。進学先に選んだ館林。決

## 館林 富岡 祐太 捕手



# 選んだ3年間に誇り

して強豪ではないが、自分が先頭に立つて強いチームにする思いもあり、誰よりもまじめに練習に取り組んだ。

1、2年生の頃は試合で思い通りに勝てず、選択した道を後悔することもあった。「強豪校で活躍している中学時代の仲間たちがうらやましくて。悔しくて」。かつての仲間を

追いつくため、ハードワークがたたたって病院

へ運ばれたこともあった。自分のプレーがうまくいかないと、思わぬ感情を表に出してチームメートと衝突もした。

「自分のチームを引っ張る。このメンバーで甲子園に行きたい」と本気で思えるようになった。

九回表の攻撃。最後の打者が三振に倒れるのをベンチの最前列から見つめた。「行くぞ。最後までしっかりしよう」。うなだれるナインを笑顔で抱え、整列に加わった。最後まで涙は見せなかった。

夢はかなわなかったが、「この仲間と野球ができた3年間は幸せだった」。館林を選んだことに、今はひとつの後悔もない。球場を後にする表情は誇らしかった。

(報道本部 井部友太)